

シリアナ

2006(平成18)年3月5日鑑賞(道頓堀東映パラス)

★★★★



監督・脚本＝スティーヴン・ギャガン／出演＝ジョージ・クルーニー／マット・デイモン／ジェフリー・ライト／クリス・クーパー／ウィリアム・ハート／マザール・ムニール／ティム・ブレイク・ネルソン／アマンダ・ピート／クリストファー・プラマー／アレクサンダー・シディグ (ワーナー・ブラザーズ映画配給／2005年アメリカ映画／128分)

第2章

面白くてタメになる

……中東の石油をめぐる利権争いはアメリカ最大の世界戦略のテーマだが、近時そこに「割って入っている」のが中国。米中接近の裏側(?)での石油をめぐる駆け引きは……? よくぞこんな生々しいテーマの映画をハリウッドが、と感心できる出来ばえに。もっとも某石油国の跡目争いとそれに絡むCIA、そして石油会社のM&Aとそれに絡む弁護士たち、さらにはエネルギーアナリストなど多彩な登場人物たちが織りなす複雑な物語の理解は大変だが、世界戦略の裏側をのぞくのなら、そりゃ仕方ないか……?



『シリアナ』とは?

この映画を楽しむためには、パンフレットの購入が不可欠。なぜならパンフレットを読んで勉強しなければ、そもそも『シリアナ』というタイトルの意味からして全くわからないから。

ネット情報によると、シリアナとは「CIA 近辺で用いられている中東再建プロジェクトを指す専門用語」と書かれており、パンフレットには「映画のきっかけになった『CIAは何をしていた?』の著者である、ロバート・ベアによるとこれは、『ワシントンのシンクタンクのjargon(業界用語)で、アメリカの利益にかなう、中東の新しい国』ということなのだ」と書かれている。

しかしそう言われても、日本人の私たちにはそのどちらもわかりにくい説明。まあそんなタイトルの映画だから、①舞台は中東の産油国、②主人公は世界を動

かす石油産業の裏にうごめく人物たち、そして③テーマは騙し・陰謀・暗殺・テロなどの恐ろしいものばかり。

新聞の宣伝には「世界で最も恐ろしいタブー」と書かれていたが、まさにそのとおり。今年1番の今風の社会問題を扱った問題作であることは明らかだが問題は、日本人の私たちがこれをどこまで理解できるかということ……。

今ドキなぜこんな映画が……？

今年の世界的話題の1つは、原油価格の高騰、そしてその原因の1つである中国の石油需要の伸びとその石油戦略の変貌。2003年のイラク戦争開始をはじめとして、それまでの数々の中東を舞台とした紛争や戦争はすべて石油の利権をめぐる争いが根本にあるもの。アメリカの中東戦略が石油をターゲットにしたものであることは明らかだが、近時そこに割って入っているのが中国。

中国の3大石油会社によるカザフスタンからの新規ルート開発のかたわら、中国政府の首脳・要人たちは中東の産油国の首脳たちと活発な資源外交を展開している。しかし、これがアメリカにとって大きな脅威であることは明らか。

他方、2001年の9・11テロ以降強まったアメリカのイスラム敵視政策に対する反発がアラブ諸国で強まっていることもたしか。イラク戦争が終わったと思ったら、今度はイランの核開発問題が焦点となっている。こんなキナ臭い情勢下、よくアメリカがこんな映画をつくったもの。いつものように私は、アメリカという国の懐の深さに感心……。

製作総指揮は？

この映画の監督・脚本はスティーブン・ギャガンだが、製作総指揮には①ジョージ・クルーニー、②スティーブン・ソダーバーグ、③ベン・コスグローブ、④ジェフ・スコールの4名が名を連ねられている。

この中でもとりわけ有名な人物が『トラフィック』（00年）を監督したスティーブン・ソダーバーグで、この『トラフィック』のチームが再結集し、総力を挙げてつくったのがこの映画というわけだ。

そしてこの映画でアカデミー賞最優秀助演男優賞に輝いたジョージ・クルーニ

ーは、スティーブン・ソダーバーグとともに映画・TVの製作会社セクション・エイトを設立しているというマルチな才能の持ち主。

4人も製作総指揮がいれば、「船頭多くして……」という心配はないのかとつい勘ぐってしまうが、パンフレットを読むとナシール王子とメシャル王子を演じる俳優にアラビア語を1から勉強させて完全にマスターさせるなど、製作スタッフの意気込みにもすごいものがあったよう。

したがってこの映画についてはテーマ・俳優・製作スタッフの3つすべてに注目しなくては……。

アメリカ側の登場人物たちは？

この映画の登場人物は多いうえ、それぞれ一クセも二クセもある人物ばかり。まずアメリカ側の登場人物は次のとおり。すなわち、

①中東での暗殺計画に従事するCIAのベテラン諜報員のボブ・バーンズ（ジョージ・クルーニー）とその元同僚のスタン・ゴフ（ウィリアム・ハート）。

②エネルギーアナリストという変わった職業に従事している若くて優秀なブライアン・ウッドマン（マット・デイモン）。ハマド王主催のパーティーに招かれた彼は、息子の死亡という不幸な出来事を契機としてその後ややこしい問題に入り込むことに。しかし、その結果はハッピーな形で報われるのだろうか？

③テキサス最大の石油会社キリーン社の経営者であるジミー・ポープ（クリス・ターパー）とその右腕のダニー・ドールトン（ティム・ブレイク・ネルソン）。彼らはコネックス社との合併によってさらなる飛躍を目指しているが、その合併話にもさまざまな思惑が……？

④キリーン社とコネックス社の合併話をコネックス社に有利に進める職務に奔走している弁護士のベネット・ホリデイ（ジェフリー・ライト）とそのボスであるディーン・ホワイティング（クリストファー・プラマー）。多分ディーンも弁護士なのだろうが、彼には弁護士業務をやっているという雰囲気は全くなく、CLI（イラン自由化委員会）という中東の民主化と称してアメリカの利権を追及する政財界組織のフィクサー的存在らしい……。したがって、この合併成功後に発生した確執とは……？

中東側の登場人物は？

他方、中東の某石油国側の登場人物は次のとおり。すなわち、

①まず第1にハマド王とその長男のナシール王子（アレクサンダー・シディグ）そして次男のメシャル王子がポイント。既に王位からの引退を決意したハマド王は、2人の息子のどちらに王位を継がせるのか……？ また国の改革と民主化を目指す兄と、この兄への対抗心を示す弟に対してアメリカはどのように対応するのか……？ それらの諸点がポイントだ。

②第2のポイントは、イスラム神学校の生徒たちや、イスラム教過激派テロリストの青い目の男、そして出稼ぎ労働者のワシム（マザール・ムニール）たちもポイント。彼らはどんな教育を受け、誰の指示により、どんな行動をとるのだろうか……？

今年のアカデミー賞候補の特徴は？

日本時間の3月6日早朝に第78回アカデミー賞が発表されたが、既に新聞で報じられていたとおり、今年のアカデミー賞の特徴は、作品賞・監督賞を中心として、『スター・ウォーズ』『ゴジラ』『ロード・オブ・ザ・リング』などのハリウッド型超大型娯楽作が全然評価されず、ノミネート作は次のように、低予算ながら社会性と強烈なメッセージ性を持った作品に集中していたこと。

すなわち、①カウボーイ同士の同性愛を描いたアン・リー監督の『ブロークバック・マウンテン』、②イスラエルへの報復テロを描いたスティーヴン・スピルバーグ監督の『ミュンヘン』、③ロサンゼルスを舞台に人種問題を扱ったポール・ハギス監督の『クラッシュ』、④小説『冷血』のモデルとなった死刑囚と交流する作家のエゴとその結末を描いたベネット・ミラー監督の『カポータ』、⑤マッカーシー上院議員の赤狩りと戦った実在のアンカーマンを描いたジョージ・クルーニー監督の『グッドナイト&グッドラック』。

私はこの傾向に大賛成。もっともそうであるため、作品賞ノミネート5作品のうち既に観たのは『ミュンヘン』の1作だけ。したがって、『ミュンヘン』以外の作品についての評論は後日に……。

最優秀助演男優賞の行方は……？

この『シリアナ』からはジョージ・クルーニーが助演男優賞にノミネートされていたが、『ブローックバック・マウンテン』のジェイク・ギレンホール、『クラッシュ』のマット・ディロンらの競争相手を前に彼が見事に最優秀助演男優賞をゲットしたのはご同慶の至り。

この映画はド派手なハリウッド映画ではなく、現在のアメリカにおいて、石油という最重要な社会的テーマを扱った映画だけに、その出来の良し悪しは俳優たちの演技力によるところが大。

したがってこの映画を観るについては特に作品への興味のみならず、そこに登場する個性的な俳優たちの演技に十分注目しよう。

CIAの内部は？

ボブは優秀なベテラン諜報員だから、任務であれば危険なところにも出かけていくのは当然。冒頭に登場するのは、このボブが2基の小型ミサイルの取引に立ち会うシーン。これは誰が、何のために買い、使うものか？ そのボブが途中から何やら変な風向きになり、いつの間にか敵側の手に落ち、残忍な拷問を受ける立場に……。

このボブを演じたジョージ・クルーニーがアカデミー賞最優秀助演男優賞を獲得したのは、この映画でのこの複雑な役柄を見事に演じたおかげ……。それにしても、CIAの内部のややこしさはどうだろう……？

弁護士の活躍の舞台はこんなところにも……？

CIAの内部と同じように(?) ややこしいのが、弁護士に与えられた任務とその任務遂行に関連して生まれてくる弁護士同士の確執。その結果、いつの間にかベネット弁護士とディーン弁護士の立場が逆転していくことになるから、その点のストーリー展開にも十分気をつけておこう。

日本では、今年3月に卒業する法科大学院第1期生に対して、5月頃に実施される新司法試験の行方が注目されている。そして若手弁護士の就職希望先は、弁

護士数200名を数える大手法律事務所に集中している。

しかし、いくら日本の法律事務所が合併を重ねて大きくなったとしても、この映画が描くようなアメリカの弁護士の仕事に、日本の弁護士が従事することはありえないだろう。そんな点も、法律を勉強している学生諸君なら興味をもって観てもらいたいが……。

観客層と観客の反応は？

私が行ったのは日曜日の夕方4時からの上映だったが、かなり空いているだろうとの悪い予想が的中して、席はガラガラ。また観客層も予想どおり年配の夫婦連れがほとんど。事前にパンフレットで少し勉強し、人間関係図を頭に入れていた私ですら、次々と変化していくストーリー展開に十分ついていくことができず、「はて、これは……？」と思うシーンがたびたび……。だから、ちょっとした興味だけをもって「夫婦50割引」でこの映画館に入っただけの年配者には、この映画のストーリーのきちんとした理解は到底ムリ。

したがって上映終了後、聞こえてくる席を立つ観客たちの話は「難しかったネエ」というものばかり。嫁ハンに対して物知り顔で説明したいオヤジもたくさんいるはずだが、今日はその説明も「要するに石油の利権に絡んだ映画だ……」という何の解説にもなっていないものばかり。

なお前にも書いたが、今日も1人、シニア料金で入り、バリバリと音をたてながらサンドイッチなどの飲食に励んでいるオッサンがいた。そのうえ、このオッサンは途中トイレに立った後、今度はなぜか私の席の近くに席替えまで……。ホンマにエエ加減にせえ！

2006(平成18)年3月6日記